

「ポリシー」策定と「学士力」

環境科学部長／環境科学研究科長

増田 佳昭

前向きにとらえたい「ポリシー策定」

最近、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー、ルーブリックなど、カタカナ英語の大氾濫である。環境科学部でも、2012年度は各学科にディプロマ・ポリシーの策定をお願いしたところであり、2013年度はカリキュラム・ポリシーの確定作業を行うことになっている。あらためてこれら「ポリシー策定作業」の意義と環境科学部の教育について考えてみたい。

周知のように、大学におけるポリシー策定を方向付けたのは、2008年の文部科学省中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」である。答申は、わが国大学教育の最大の問題点は「教育の質が保証されていない」ことで、このままでは「学位そのものが国際的な通用性を失う」との問題意識を背景にしている。そして改善方向として、(1) 学生が「何ができるようになるか」を重視した学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を明確にして、積極的に公開する、(2) 順次性のある体系的な教育課程（カリキュラム・ポリシー）を編成する、(3) 大学全入時代を迎えて、入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を明確化することを打ち出した。

「中教審答申」というと、われわれの世代はつい反発が先立ちがちだが、大学人として、これを前向きに受け止めることも大事であろう。「ポリシー策定」は、一言でいえば、大学としての教育目標と、目標達成の手段ないしプロセスを明示的に示そうというものである。はやりの言葉でいえば「見える化」である。「見える化」によって、学生は大学が考える教育目標と体系を理解し、自らの目標と到達度合いを確認することができる。教職員は、大学教育の目標を共有しそれぞれの役割を確認することができる。大学が社会に果たす最大の役割は学生教育であるが、その役割を具体的に確認する上でも、「見える化」の作業は重要であろう。

また、目標を定め、手段とプロセスを設定する単位は、基本的には入試単位である学科である。それぞれの学科が、学生教育にどのような目標を設定し（DP）、そのためにどのようなカリキュラム体系を用意しているのか（CP）、そしてそれにふさわしい学生をどのように受け入れるのか（AP）を、統合的に整理し、「見える化」することが求められている。策定作業は多少の煩雑さを伴うが、その過程で、学科の教育目標に関する議論が期待されるし、またカリキュラム上の問題点も明らかになるのではないだろうか。前向きに受け止めて、大学の社会的役割と責任を再確認する機会にする必要があるだろう。

「社会人基礎力」と「学士力」

さて、大学における教育目標設定と手順について、もう少し考えてみたい。

教育の目標設定論は、むしろ産業界から提起されたようである。経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」がそれである。その背景には、企業競争の激化とグローバル化があり、人材開発が競争対応の重要な要素になったことがある。だから、企業が必要とする人材像を示して、学校や社会はそれを参考にしながら、人材育成をすすめるべきだというのである。ストレートに言えば、企業が採用したい人材像の提示である。

「社会人基礎力」は、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の三つの力からなるとされる。アクション力には、「物事に進んで取り組む力（主体性）」や「他人に働きかけ巻き込む力（働きかけ力）」、「目的を設定し確実に行動する力（実行力）」が含まれる。シンキング力には、「現状を分析し目的や課題を明らかにする力（課題発見力）」、「課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力（計画力）」、「新しい価値を生み出す力（創造力）」が含まれる。チームワーク力には、「自分の意見を伝える（発信力）」、「相手の意見を聴く（傾聴力）」、「意見や立場の違いを理解する（柔軟性）」、「周囲の人との関係性を理解する（状況把握力）」、「社会のルールや人との約束を守る（規律性）」、「ストレスへの対応（ストレスコントロール力）」が含まれている。

これに対して前出の文科省中教審答申は、学士課程を通じて学生が身につける力を「学士力」と呼んでいる。その内容は、専攻する学問分野を中心とする「知識・理解」、コミュニケーションスキルや情報リテラシーなどの「汎用的技能」、自己管理能力やチームワーク、倫理観などの「態度・志向性」、課題解決のための「統合的な学習経験と創造的思考力」の4つから構成されている。

環境科学部の教育と「学士力」

経産省のいう「社会人基礎力」は一見わかりやすい。なぜわかりやすいかというと、最大公約数的な期待を述べていて、ある意味で常識的だからである。企業が学生をどのような基準で採用しているのかがよくわかる。就活学生にもしっかりと意識させたい項目である。最大の問題は、そのような能力をどうしたら身につけられるかが、残念ながらはっきりしないことであろう。

中教審答申のいう「学士力」は「参考指標」のようなので限界はあろうが、大学教育を担当する当事者としては、きわめてわかりにくい。なぜかという、「理解、知識」、「汎用的技能」と、「態度・志向性」、「創造的思考」がいっしょくたにされているからであろう。前2者は従来の大学教育の中で目標設定も手順設定も比較的容易にできる、大学として得意の領域である。ところが後2者は目標設定自体も難しいし、手順設定はさらに難しい。いわば大学にとっては未知の領域である。

私見だが、前者の「理解、知識」と「汎用的技能」については、学科ごとによりブレークダウンされた目標設定がポイントとなろう。それぞれの学科教育が何を指すのかが具体的に問われる部分である。学科の卒業生が身につけているべき能力をどれだけの確に表現できるかが、問われるように思う。一般論過ぎず、かといって具体的過ぎない表現は確かに難しいのではあるが。

後者の、未知の領域については、わが環境科学部はすでにかかなりの蓄積を持っているのではないだろうか。創立以来実施してきた「環境フィールドワーク」、全学レベルでの近江楽座の活動や近江楽士（地域学副専攻）は、経産省のいう「社会人基礎力」、中教審の「学士力」がいう「態度・志向性」や「創造的思考」につながる教育実践であることは間違いないと思う。「学士力」形成における未知の領域への積極的な取り組みは、おそらく、環境科学部教育の大きな優位性なのである。

すでにフィールドワークの目標設定については、委員会や教員会議で一定の議論がなされている。今後、フィールドワークをはじめ学生地域活動も含めた「現場教育」について、期待される能力形成と目標設定、それを実現するための手順について、理論化を図る段階に来ているのではないかと思う。当然効果検証も含めてである。教育の目標とあり方について、おおいに議論されることを期待したい。